礼拝説教（2020 年 1 月 26 日）

説教者：中村信哉

真っ直ぐなことばは痛い

ヨブ記 4-7 章

はじめに

昨年から、毎月第四主日の説教は、旧約聖書からすることにしています。私が旧約聖書から説教をする時は、「ヨブ記」からしています。

今日は、4-7 章に書かれている内容から学びたいと思いますけれども、まずは 1-3 章に書かれていた内容を振り返ってみましょう。

1. ヨブの試練と信仰

ヨブという人は、誠実で直ぐな心を持ち、神を恐れて悪から遠ざかっている人でした。神様は、そんなヨブを祝福して、多くの財産と多くの子ども（10 人）を与えられました。

しかしそんなヨブに、サタンが目を留めて、神様にこう言います。「ヨブは、あなたに祝福されて、多くの財産と多くの子どもが与えられているから、あなたを恐れているのです。もし財産と子どもを失えば、きっとあなたを呪うに決まっています」。

そこで神様はサタンに、ヨブの財産と子どもを奪うことを許可しました。するとヨブは、犯罪や自然災害に巻き込まれて、一日のうちに、財産と子どもをすべて失ってしまうのです。

しかしヨブは、そのような試練の中でも、決して神様への信仰を失いませんでした。彼は、神様を礼拝してこのように言います。**「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」（ヨブ記 1:21）**。

するとサタンはもう一度、神様にこう言います。「ヨブは、財産と子どもを奪われても、健康が与えられているから、あなたを恐れているのです。もし健康を失えば、きっとあなたを呪うに決まっています」。

そこで神様はサタンに、ヨブから健康を奪うことを許可します。するとヨブは、足の裏から頭のてっぺんまで、悪性の腫物で侵されるのです。夜眠れないほどの痛みがあり、やせ細っていきます。内臓も侵され、身体から臭いが出るようになりました。その結果、人々からも嫌われるようになります。そして妻からも、「神を呪って死になさい」と見捨てられ、妻は神様への信仰を捨てていきます。

しかしヨブは、そのような試練が続く中でも、神様への信仰を失いませんでした。彼は、妻に向かってこのように言います。**「あなたは、どこかの愚かな女が言うようなことを言っている。私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいも受けるべきではないか」（ヨブ記 2:10）**。

2. ヨブの三人の友人

ヨブには、三人の友人がいました。テマン人エリファズ、シュアハ人ビルダデ、ナアマ人ツォファルの三人です。彼らは、ヨブが非常に苦しい試練の中にあると聞いて、ヨブを慰めに駆けつけて来たのです。

彼らは、ヨブの変わり果てた姿を見て愕然とします。すべてを失い、痛々しい病に侵されているヨブを見て、彼らにはかける言葉も見つかりませんでした。彼らはただ、ヨブのために涙を流し、一週間一言も語らずに、ヨブのそばに寄り添い続けたのです。

3. ヨブの苦しみ

一週間後、ヨブはようやく自分の心の中にある思いを語り始めます。ヨブは確かに、神様への信仰を失いませんでした。神様を呪ったりもしませんでした。しかし心の中に苦しみがなかったわけではありません。彼は、人々からも嫌われ、妻からも見捨てられ、心の中の苦しみを聞いてくれる人がいなかったのです。

しかし三人の友人が、自分のために涙を流し、一週間一言も語らずに、そばに寄り添い続けてくれたことによって、ようやく心の中の思いを語り始めるのです。

ヨブはこの時、死を願うほど苦しんでいました。むしろ自分が生まれなかったほうがよかったと思うほど、苦しんでいたのです。ヨブにとって、死ぬことよりも、生きることのほうが辛かったのです。

ヨブは財産や子どもや健康を失い、人々や妻からも見捨てられることは辛かったでしょう。しかしヨブにとって一番辛かったことは、神様が沈黙しておられることでした。苦しい時こそ、神様の御言葉を必要としていました。試練の時こそ、神様との交わりを必要としていました。しかしどんなに神様を礼拝し、賛美し、信仰を告白しても、神様は語りかけてくださらない。ヨブにとって一番辛かったことは、財産や子どもや健康を失うことでも、人々や妻から見捨てられることでもなく、神様を失うこと、神様から見捨てられることであったのです。

ヨブは、神様とサタンのやり取りを知りません。なぜ自分がこのような苦しみに遭わなければならないのか、なぜ神様は沈黙しておられるのか、その意味が分からず苦しんでいたのです。

4. テマン人エリファズの励まし

4-7 章には、三人の友人の一人であるテマン人エリファズとヨブの対話が書かれています。4-5 章でエリファズが語り、6-7 章でヨブが答えるというかたちになっています。

エリファズは、3 章に書かれているヨブの心の中の苦しみを聞きました。しかしエリファズは、ヨブの言葉を聞いて、ヨブが不信仰に思えたのです。つまり、ヨブがこのような苦しい試練に遭っているのは、ヨブの信仰に問題があるからだ、ヨブの試練の原因はヨブの罪にあるのだと判断したのです。

4：7-9 にあるエリファズの言葉に、そのことが表れています。**「さあ、思い出せ。だれか、**

潔白なのに滅びた者があるか。私の見てきたところでは、不法を耕して、害悪を蒔く者が、自らそれらを刈り取るのだ」。

エリファズの根底にある考えは、いわゆる「因果応報」です。人は必ず、自分の行いによって報いを受けるというものです。善いことをした場合は褒美を受け、悪いことをした場合は罰を受けるというものです。この「因果応報」の原理は、時代と文化を越えて、すべての人間の心の中にある原理です。これは神様が、人間の心に植え付けられたものです。この「因果応報」の原理に基づいて、人間社会の秩序が保たれてきました。

聖書の中にも、**「人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります」（ガラテヤ 6:7）**という言葉があります。聖書全体も、神様は善い行いに報い、悪い行いを裁かれると教えています。

エリファズはこの「因果応報」の原理で、ヨブの試練を解釈し、ヨブを教え導こうとします。そしてヨブにはきっと、何か悔い改めていない罪があるはずだ、だから罪を認めて悔い改めよ、そうすれば祝福を取り戻せるはずだと言うのです。

ではこのエリファズの言葉に対して、ヨブは何と答えるのでしょうか。ヨブは６：6-7 でこのように言います。**「味のない物は塩なしに食べられるだろうか。卵の白身に味があるだろうか。私の喉はそれを受けつけない。それらは私には腐った食物のようだ」**。ヨブにとってエリファズの言葉は、「味のない卵の白身のようなもの」「腐った食物のようなもの」だと言うのです。エリファズの言葉は、ヨブの心に何も響かなかったのです。なぜならヨブには、自分がこのような激しい試練を受けなければならないほど、大きな罪があるとは思えなかったからです。もちろん自分には全く罪がないとか、自分は完璧な人間だと思っていたわけではありません。しかし、このような激しい苦しみに値するほど大きな罪が、自分にあるとはどうしても思えなかったのです。

では、エリファズとヨブのどちらが正しいのでしょうか。神様は、ヨブ記の最後の章である 42：7 で、エリファズにこのように言われます。**「主はテマン人エリファズに言われた。『わたしの怒りはあなたとあなたの二人の友に向かって燃える。あなたがたが、わたしのしもべヨブのように、わたしについて確かなことを語らなかったからだ』」**。神様は、エリファズに怒りを燃やし、エリファズが確かなことを語らなかったと言われます。

エリファズは何が間違っていたのでしょうか。エリファズは、ヨブの友人として、ヨブを励まそうとして語ったのだと思います。しかしエリファズは、神様の怒りを買うのです。

エリファズの問題は、人生に起こるすべての出来事は「因果応報」の原理で説明できると考えて、ヨブの苦しみも「因果応報」の原理で解釈し、ヨブの罪が原因であるとヨブを責め、ヨブをさらに苦しめたことにあります。

人生に起こる苦しみや試練の原因は、すべて「因果応報」の原理で説明できるものではありません。イエス様は、生まれたときから目の見えない人をご覧になって、こう言われました。**「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです」（ヨハネ 9:3）**。またイエス様は、愛するラザロが病気になった時、こう言われました。**「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです」（ヨハネ 10:4）**。また使徒パウロが肉

体に一つのとげを持った時、イエス様はこう言われました。**「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」（IIコリント 12:9）**。

人生に起こる苦しみや試練の原因は、すべて「因果応報」の原理で説明できるものではありません。しかし「因果応報」の原理で説明できるものもあります。初代教会で、アナニヤとサッピラが神様を欺いた時、彼らはその場で倒れ、息絶えて死んだのです（使徒 5：1-11）。またパウロは、ふさわしくない人がわきまえもなく聖餐式に与る時、さばきを招き、病気や死を招くこともあると教えています（Ⅰコリント 11：27-30）。

エリファズの問題は、人生に起こるすべての出来事を「因果応報」の原理で説明できると考えたことです。人生に起こる出来事は、「因果応報」の原理で説明できるものもあれば、説明できないものもあるのです。そのようなわきまえも持たずに、ヨブの苦しみを「因果応報」で解釈し、ヨブの罪が原因であると決めつけ、ヨブを責め立てたのです。エリファズは、自分の解釈、自分の考えこそが絶対に正しいと思い込み、ヨブの言葉に耳を傾けようとしませんでした。ヨブを理解しようとすることよりも、ヨブを診断しようとしてしまったのです。

1-2 章に書かれている神様とサタンのやり取りを見ると、ヨブの試練の原因は、ヨブの罪にあるのではないことが分かります。ヨブは決して大きな罪を犯したから、罰として激しい試練を受けているのではないのです。このことからも、エリファズの励ましはいかに的外れだったのかが分かります。

ヨブは６：14 で**「落胆している者には、友からの友情を。さもないと、全能者への恐れを捨てるだろう」**と言っています。苦しみの中にあるヨブが必要としていたのは、自分の言葉に耳を傾け、自分を理解してくれる友人だったのです。しかしエリファズは、ヨブの言葉に耳を傾けることよりも、「因果応報」の原理でヨブを見て、悔い改めろ、悔い改めろと責め立てたのです。ヨブは、財産と子どもと健康を失い、人々や妻からも見捨てられ、友人からも責められることになるのです。エリファズの励ましは、ヨブの苦しみを増すことにしかならなかったのです。

<u>おわりに</u>

「因果応報」の原理は、神様が私たち人間の心に植え付けてくださったものです。この原理がなかったら、人間社会の秩序は保てなかったでしょう。しかし私たちの人生に起こるすべての出来事が、「因果応報」の原理で解釈できるわけではありません。すべての出来事を「因果応報」の原理で解釈することは危険です。神様は、「因果応報」の枠の中に納まる方ではありません。神様の御業をすべて「因果応報」の原理で説明できると考えてはなりません。この「因果応報」の原理を、信仰のすべてに適用することは危険です。そうすれば、神様の恵みや福音が理解できなくなります。そして、功績主義や律法主義に陥り、人を裁き、高慢になります。

聖書の中心的なメッセージは、神様が罪人を愛し、罪人の罪を十字架において神の子イエス様に償わせ、神の子イエス様を信じる者の罪を「恵み」によって赦し、救われるというも

のです。この福音は、「因果応報」の枠を超えています。神様は確かに罪を裁かれます。しかし同時に、愛と恵みに富んだ方なのです。

私たちイエス様を信じるクリスチャンは、神様の愛と恵みに生かされている者です。ヨブもまた、神様の愛と恵みに生かされていた人でした。

私たちは、ヨブのような苦しみと試練の中にある人に、どのような態度を示し、どのような言葉をかけるべきでしょうか。使徒パウロは、このように言いました。**「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)。「だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。・・・私はこう確信しています。・・・私たちの主キリストイエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」(ローマ 8:35、38、39)**。私たちイエス様を信じるクリスチャンは、決して神様の愛から引き離されることはありません。私たちは、すべての出来事を「因果応報」の原理で見て、決めつけ、人を裁くのではなく、まずその人の言葉に熱心に耳を傾けるべきです。そしてその苦しみを理解しようと努め、たとえ苦しみや試練の意味は分からなくても、神様の愛を見失うことがないように、そして神様を愛することを止めずにいるように、そうすれば必ずその苦しみや試練も益と変えられる時が来ることを分かち合い、共に祈ることです。

私たちは、苦しみや試練の中にある人にとって、そのような友人であることが求められているのではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは天地万物を造り、今も歴史を導いておられる方です。私たちの人生に起こるすべての出来事は、あなたの御手の中にあります。しかし私たちの人生に起こる出来事の意味は、私たちには分かりません。分からないゆえに苦しみます。しかし私たちは、それらの出来事をすべて説明できるかのように高慢になることがないように、それらの出来事を自分の経験や考えの枠の中で解釈し、的外れに誰かを裁き、傷つけることがないように。

どうかあなたへの恐れをもってわきまえ、慎み、いかなる時もあなたの愛を疑わず、あなたを愛することを止めずに、その出来事があなたの深い愛と恵みの御計画の中にあること、やがて必ず私たちの益となるという希望を持ち続けることができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。